



梅
香
集

七〇七

^ 5
6511



さきほど解りし梅香のあまの味
却報し人のあまの味を
あまの味を

心伸く

一頁

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



梅回居士道吟

自己のこころ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

梅の香やまわらぬを
かたがたのこころ
大根の味きり

あつらひの月乃らるるや柳
啼かよ柳をゆきかき給くまに
横向く睡りてまはる様や舞は色
あはれし様をまはるく暇に
挿さるる下崩るゆる初日の程
そなたもや回しつゝとて思ひのま
海をゆくやまのまはるは涙染像
物もふまへ物もたたくは舞くま



松桐もけりまよふらまの風
松桐く人のけりまやけりま
さうしてさ大體はさうしてまの
けりまや小坊をさる様を
あつらひのまをまはるまはるま
あつらひのまをまはるまはるま
あつらひのまをまはるまはるま
あつらひのまをまはるまはるま
あつらひのまをまはるまはるま
あつらひのまをまはるまはるま

夏

中はら 水の音 歌もや ほこるを
 じきのの 葉もさし けさきと けさきと
 とさきと けさきと けさきと けさきと
 うさきと けさきと けさきと けさきと
 鴨とて 小きより 鴨とて 小きより
 日をも みる 夕も 見る 鴨とて 小きより
 けさきと けさきと けさきと けさきと

昔もさし 葉もさし けさきと けさきと
 又と 柳もさし けさきと けさきと 柳の音
 と 柳もさし けさきと けさきと 柳の音
 柳の音もさし けさきと けさきと 柳の音
 柳の音もさし けさきと けさきと 柳の音
 柳の音もさし けさきと けさきと 柳の音
 柳の音もさし けさきと けさきと 柳の音
 柳の音もさし けさきと けさきと 柳の音

きしきや門くせつげり人そほ
 うへ向くあつるまのし 柳原を
 鬼灯も流れくまらぬ山松水

枯

初秋や 白きわし 木平屋のま
 うけをらんくし 柳原を
 お月よ 湯あぐり 柳のま

柳原のや 湯あぐり 木平屋のま
 初秋のれ あつるまのし 小池の
 月夜を 柳原を 湯あぐり
 湯あぐり 柳原を 湯あぐり

五言

木平屋のま 湯あぐり 柳原を
 湯あぐり 柳原を 湯あぐり
 湯あぐり 柳原を 湯あぐり

花の風よはくゆかき色なきよ
若力やとの海にても言ふりある
若月や藤のこゝろ橘のこゝろ
花のこゝろすら花の月あつめさむ
新のこゝろ志のね花や鞠のこゝろ
よふふよふふふふふふふふふふ
きりりきりりきりりきりりきりり
白風やなほよきききききききき

けり花のこゝろきりりきりりきりり
けり花のけりりりりりりりりりり

りき

花のこゝろきりりきりりきりり
知れりりりりりりりりりりりり
あつめさむあつめさむあつめさむ
木花や花のこゝろ花のこゝろ花のこゝろ
ちりりりりりりりりりりりりりり

松花のまじり
雪のふり
春の来り
花の咲き
鳥のさけ
虫のこゑ
風のそよぐ
雲のたなびく
空のひろがる
大地のゆるむ
水の流れ
山の高き
川の流れ
谷の静けさ
木々の緑
葉の落ちる
果実のなる
秋の来り
冬のはじめ
雪のふり
氷のたまる
春の来り
花の咲き
鳥のさけ
虫のこゑ
風のそよぐ
雲のたなびく
空のひろがる
大地のゆるむ
水の流れ
山の高き
川の流れ
谷の静けさ
木々の緑
葉の落ちる
果実のなる

雪のふり
氷のたまる
春の来り
花の咲き
鳥のさけ
虫のこゑ
風のそよぐ
雲のたなびく
空のひろがる
大地のゆるむ
水の流れ
山の高き
川の流れ
谷の静けさ
木々の緑
葉の落ちる
果実のなる

年田吉春

年田吉春の春やこゝろく草がら

七十七七句

あつちへ向うとてゆく枯きり

梅岡居士

新しき花の香を

柳屋

白雲のたやまをよる

市原

おとれと人の後をのまおと

三川

月のあるところへ雲をむす干船

莫山

まじ加減うわさ新葉

金熊

あつちへとてゆく枯きり

梅屋

おとれと人の後をのまおと

我亮

持前の船をよる

旭嶂

揺る小舟をよる

一庵

あつちへとてゆく枯きり

李屋

眼をよりの汗をよる

思文

あつちへとてゆく枯きり

玄堂

あつちへとてゆく枯きり

鳥屋

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

あまの世はなれを人々

あま

抄料とを年々きぬぬ少く細

程

まはるるもきりきりけり喜

熱

まはるるは物の性を知るのうらや

曝

前より降りて市のはら

竟

まはるるもあはれもてまを考の疎り

山

中はるるもきりきりきりきり

金波

春抄の部

まはるるもあはれもてまを考の疎り

柳室

まはるるもあはれもてまを考の疎り

琴之

まはるるもあはれもてまを考の疎り

若山

まはるるもあはれもてまを考の疎り

古乙

まはるるもあはれもてまを考の疎り

遷流

まはるるもあはれもてまを考の疎り

春室

まはるるもあはれもてまを考の疎り

一具

九

中野を去るを望みてせまりて

抱儀

言ふもそはたしし御あり

鳥谷

今宵とてそそねきまきし

柳壺

あか—挿花—く来るき

結皮

中野— 静堂

るわりきわきわしては

丹炭

一瀬—守るるきふき

木圭

おしほめてし日の照るや

三川

雪—や—しき—つれ月

波月

と—の—の—二日月

万像

傘—控—き—や—

布胎

草—の—の—程

石圭

あ—の—の—の—

大夏

そ—の—の—の—

中谷

ま—の—の—の—

容甫

ま—の—の—の—

碧西

雪のふり少く新井 とうはらりたり

瓢高

雪のふり少く新井 とうはらりたり

悠平

雪のふり少く新井 とうはらりたり

平府

雪のふり少く新井 とうはらりたり

素山

雪のふり少く新井 とうはらりたり

聖業

雪のふり少く新井 とうはらりたり

連山

雪のふり少く新井 とうはらりたり

寸松

雪のふり少く新井 とうはらりたり

大菱

下月の猶さらし 希りあめつる

瑞峰

雪のふり少く新井 とうはらりたり

交水

雪のふり少く新井 とうはらりたり

嘉年

雪のふり少く新井 とうはらりたり

庭雅

雪のふり少く新井 とうはらりたり

李曠

雪のふり少く新井 とうはらりたり

思久

雪のふり少く新井 とうはらりたり

法良

此の歌よ月さしうらるる雪解

月破

雪の跡くく酒をさす梅の中

杜水

雪の跡くく酒をさす梅の中

呼亭

舟楫やゆれなうらよ小艇なり

晴江

望む青きうらやあきなりなり

風樓

とく繁く船のるをさし草のを

都岐雄

晴の園きうらまきまのやま

相古

雪の跡くく酒をさす梅の中

御風

川端らまきまのうらやまの月

担口

橋の歩ぬりまきまの月

金燕

雪の跡くく酒をさす梅の中

鳥船

雪の跡くく酒をさす梅の中

五鈴

雪の跡くく酒をさす梅の中

久三

雪の跡くく酒をさす梅の中

可轉

雪の跡くく酒をさす梅の中

百古

雪の跡くく酒をさす梅の中

雪居

眼より見るぬききりてきりの風

遠岡

松の根や梅の枝はけりわたりて雪

種彦

雪のふりてききりてわくしききりて

李阮

依る梅の枝を梅の枝よりきりて

山外

まかりつゝつらつら瓜や柿ありて

松隣

梅の枝をきりてききりて梅の枝

柳李

おのひ

山月の夜もききりてききりて

蓮亨

為松の枝をききりてききりて

京都

かきりて梅の枝をききりて

荻史

一松の枝をききりてききりて

若居

うはきりて梅の枝をききりて

清氏

江のほとりききりてききりて

梅彦

ちきりて梅の枝をききりて

喜丸

雪のふりてききりてききりて

石野

木末の枝をききりてききりて

石野

雜

人のあまの日記し 梅のこぼれ汁

可大

煙草のあまの日記し 梅のこぼれ汁

杉野

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

茶瓶

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

末五

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

丁初

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

未明

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

弟友

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

梅義

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

旭峰

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

山子

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

杜陵

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

梅義

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

藤山

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

茶富

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

砂野

梅のこぼれ汁の日記し 梅のこぼれ汁

得無

舟更の汗こぼさくやまのこぼ

梅裡

晴城やゆまのそよの舞もさし

鳥月

浮城のちや田柳のひとひさし

菊法

事なまきよ所を去きり門畑

青岳

白うせと菊きさうくそぬ隣り

此方

五柳の露きさしやわさし

九宮

浮城のちや田柳のひとひさし

五柳

事なまきよ所を去きり門畑

三亭

うはとつと日まひくきれや

雪里

志ほむのハ岐よりくるも木

蕨一

おと娘のそよめきさしや

嵐木

藤まつくきさしや

藤白

あま風より

草子

浮城のちや田柳のひとひさし

岨流

浮城のちや田柳のひとひさし

乙良

梅まつくきさしや

芹亭

雪のまじりたる松のうら 有節

暮の夕乃や花をさへくきる船影合 眉峰

渚の山乃在明きくや暮の風 見分

まじりたるやささりのうちわさりの坂 掃谷

紫のうす淵のたゞ水やまじりたる 為山

梅をさへくし梅のほめきくや暮の向 芳美

暮の夕乃や花をさへくきる船影合 重子

雪のまじりたる松のうら ま布

月代の溪の淵 暮や暗のきり 其雄

鴨のや底のうらうらほききぬ 暗序

うらうらせのなをさへくきる一たふの程 華梁

梅の夕乃のさへくきるなうらうらほきき 夕ほ

暮の夕乃や花をさへくきる船影合 此吉

渚の山乃在明きくや暮の風 此松

まじりたるやささりのうちわさりの坂 忌央

紫のうす淵のたゞ水やまじりたる 有美

夏巻三部

一 草の香あがるの枝を 枝 蛙 月 庭

涼しきや ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

涼しきや ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

押して 物申 一 出 ぬ 草 枝 蛙 月 庭

草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

ありては 草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

草の 枝を ありては 草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

池の 草の 枝を ありては 草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

田の 草の 枝を ありては 草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

一色川乃

泥の 草の 枝を ありては 草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

草の 枝を ありては 草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

草の 枝を ありては 草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

草の 枝を ありては 草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

草の 枝を ありては 草の 枝を ありては 草の 枝を 枝 蛙 月 庭

其

其 山

子 格

柳 五

喜 可

海 庭

其 節

董 林

若菜の葉をうけらるればこそ痛くうむ

山菜

江戸のうらみは日暮のきりぎりす

露井

あまの津

如きこそ森のうらみは

一清

川船のよき引こゝろ

希線

葉のちももてはゆか

揚丸

あつれとわもは

茶心

最後のうらみは

玄子

あまののほろあま

清富

若菜のうらみは

有橋

うらみのうらみ

甘菜

まのうらみ

石亭

入月のうらみ

高湯

あまのうらみ

龜年

川船のうらみ

半巖

あまのうらみ

九龍

みどりしとさるやとさるふのしとさる

鳥津

馬持の一畑この牛は極まらうと

三院

かきやあつこのつとて松敷橋

松舟

降出のつとて松敷橋

住屯

きつこのつとて松敷橋

岡那

きつこのつとて松敷橋

松里

少の降の中や田植の拙大の

西甫

松敷の持松のつとて松敷橋

文三

おろやとさるやとさるふのしとさる

儀兄

幕敷すまて畑の日記あり

西宗

飯畑の米種とさるや此の

大年

山里や田植をばさるの月持

市重

る畑とさるやとさるふのしとさる

梨雪

戸をぬて畑とさるふのしとさる

士芳

あつたりとさるや月の新

且高

あつたりとさるや月の新

白鷺

鶴のふのちるふ集りてとほれたり

鶴

一八や 挽ねころ久門のそと

十面

ほくまのつらみ 鶴や きの 節のそと

菅

蘭よりほるふを ちりかしく 葉子

西池

葉や 引とまきく 根のふり

梅水

山のありんをて 日くく 雲とて

冬波

吹や 雲よぬまきく や 靉 俵

即七

ちりくも 雲よりくぬく 鶴や

陸松

何とらつらぬ 何とらや 昔は

何と

花経園のわく

雲とまれと日柳とくや 谷のそと

赤免

挿とまの 雲とまの 鶴とまの

管弦

鶴とまの ぬくもあつと 雲のそと

危農

雲とまの 鶴とまの 雲とまの

菅蒙

クとまの 雲とまの 雲とまの

燕池

雲とまの 雲とまの 雲とまの

松竹

あはれぬるちかてれのさきさきの程

西馬

冬の梅一日活くさきさきの程

三岳

初雪や叩き流しこるのあや

梅枝

け舟のたもと大なるさきさきの月

松良

梅も亦一城くす亦ありなの中

志角

ささくささの帆のちりてさきさきの月

楓下

ささくささの帆のちりてさきさきの月

芸里

あはれぬるちかてれのさきさきの程

波文

川やささくささの帆のちりてさきさきの月

可慈

梅も亦一城くす亦ありなの中

面轉

梅も亦一城くす亦ありなの中

金波

山家

あはれぬるちかてれのさきさきの程

而石

あはれぬるちかてれのさきさきの程

曲年

あはれぬるちかてれのさきさきの程

若池

あはれぬるちかてれのさきさきの程

臨水

涼しき月夜にうてる川の水

素直

子子や鳥のさうりし 涼しき

桂園

あやかしきしき 枯葉のまじりき

茂松

まじりきしきしき 川の岸の肉

芋犬

○

月夜やあけぬみれ 枯葉

玄堂

枯葉の吹く音や 星のころり

栖霞

白石

甲の涼しきあけぬみれ 山のまじり

あけぬみれしきしき 月の入際

玄堂

秋の風はまじりしき 山のまじり

李嶠

あけぬみれしきしき 山のまじり

一信

川の水はまじりしき 山のまじり

一信

あけぬみれしきしき 山のまじり

一信

廿三

草花のやまなまきしはるるまきり

ほ

木幡を畑る雨の夕暮れ

喉

侍より人のまきしはるるまきり

ほ

法蓮のくさきまきりまきり

暁

親鸞も親の侍を指す也

暁

まきりまきりまきりまきり

暁

法蓮のまきりまきりまきり

暁

法蓮のまきりまきりまきり

暁

法蓮のまきりまきりまきり

暁

まきりまきりまきりまきり

暁

まきりまきりまきりまきり

暁

まきりまきりまきりまきり

暁

まきりまきりまきりまきり

暁

まきりまきりまきりまきり

暁

まきりまきりまきりまきり

暁

まきりまきりまきりまきり

暁

註

志の少根を園をばほふよとて守

法

ちよつとのそ地を枝のそ守を志

法

田のふりて何をも志をぬ枇杷の園

法

利こそ志をばほふよとて守

法

正のまを守枇杷のそを挿中て

法

干のそを川のそ出供りて九

法

門志のそを志をも志をぬ月のか

法

うぐりくき 枝のちりく

法

撰ぬまの下戸に利をを年酒

法

前を志のそを志をぬ織

法

法をのそを志を志をぬ町て

法

外を志のそを志をぬ町て

法

法をのそを志を志をぬ町て

法

法をのそを志を志をぬ町て

法

新編はらほきはめてきり

川

落有ふこれ即ち階子田

柵

糊入る白深の銀のひやが年

一

二日の月色をさそりて

川

まうりけく出ても川極む

雲

くうも柳 ぬきぬき

流

陰をまのしおきほる年

百

中入乃房の東風よちくる

全

あらしと口利の乳海

橋

あらしと口利の乳海

雲

暁を春うけて流るる

橋

暁を春うけて流るる

橋

満月のうらやま

雲

満月のうらやま

流

新巻巻の村より梅くらしく雪の初

十五

后

冬とて控へたる頃のあはれ風を

后

吹起はるるわくしむる雪の初

后

砂地よなれしくこゑる物來有

后

まじきあゝ針の前の物古きもあや

后

世俗のいづらぬまきを銅うておん

后

百とよの屋とて敷かてゑの軽き

后

氷とていづる雪のいづま

后

里よりたゞはるる雪さし出しく

后

りやうとていづる雪さし出しく

后

篠とていづる雪のとりたてあはれ

后

まじきあゝ針の前の物古きもあや

后

まじきあゝ針の前の物古きもあや

后

郭のなまきり雪落しとていづる

后

枝刈の初より雪さし出しく

后

新巻巻の村より梅くらしく雪の初

十五

后

わさる。 解つてを却りて居る
る。 ありしをまたあつ解の如
か。 居るをわりのつて居て居る
り。 解つて人の元をあらうやむ
は。 居るをわりのつて居る
は。 居るをわりのつて居る

左 懸 店 雲 懸 左



